



平成29年1月27日
佛教大学附属幼稚園

「ときには自画自賛を」

園長 藤堂俊英

立春が過ぎ寒さの中にも日脚が延びると、春までもう一息の辛抱と気分も楽になります。人類が最初に使用した時計は日時計だと言われています。小学校の理科の時間に、割りばしと板切れとボール紙で日時計を作りました。20センチばかりの割りばしの長さは変わらないのに、陽が投げかける影の長さは朝・昼・夕と刻々変化します。太陽が頭上に来た時に影は最も短くなりますが、20センチの割りばしの全てがその中に凝縮され収まっています。この日時計の針と影を例にして胎児の成長が次のように説明されることがあります(井尻正二『人の祖先と子どものおいたち』より)。

人間の赤ちゃんは母胎の中では羊水に浮かんでいますが、妊娠1か月目くらいには水中で呼吸をするのに必要な鰓がみられ、2か月目くらいになると陸上生活に不可欠な肺ができ、5か月目くらいになるとうぶ毛や爪がはえ、7か月目くらいに入るとサルの体毛のような剛毛が生えてくるそうです。つまり赤ちゃんはお母さんのお腹の中にいるわずか280日ほどの間に、生物進化の歴史を一気に体験し生まれてくるのです。ちょうど日時計の針の影がどんなに短くなくても、針の全長すべてがその影の中に収まっているようにです。これが生物学で「個体発生は系統発生を繰り返す」と見る反復説です。

冬休み、幼稚園に通う恐竜ファンの孫と迫力満載の『恐竜図鑑』を見ながら、ふと辻征夫さんの「春の問題」という詩を思い出しました。

「また春になってしまった これは何回めの春であるのか ぼくにはわからない 人類出現前の春もまた 春だったのだろうか 原始時代には ひと はこれが春だなんて知らずに (ただ要するにいまなのだと思って) そこらにやたらに咲く春の花を ぼんやり 原始的な眼つきで ぼんやり眺めていたりしたのだろうか 微風にひらひら舞い落ちる小さい花 あるいはドサッと頭上に落下する巨大な花 ああこの花々が主食だったら ぐらしくはどんなにらくだろう くだいおれに恐竜なんかが 殺せるわけがないじゃないか ちきしょう などと原始語でつぶやき 石斧や 棍棒などにちらと眼をやり 膝をかかえてかんがえこむ そんな男もいたのだろうか でもしかたがないや がんばらなくちゃと かれがまた洞窟の外の花々に眼を戻すと… おどろくべし! ちょっとした瞬間に 日はすでにどっぷりと暮れ 鼻先まで ふあつい闇と 亡霊のマンモスなどが 鬼気迫るように 迫っていたのだ 髯や鬚の原始時代の 原始人よ 不安や いろんな種類のおっかなさに よくぞ耐えてこんにちまで 生きてきたなと 誉めてやりたいが きみは すなわちぼくで ぼくはきみなんで 自画自賛はつつしみたい」

恐竜と人類の接触の有無は別にして、私たちの遠いご先祖がマンモスにも腰を抜かすことがなかった気丈な人たちであったことは間違いありません。自画自賛とは自画像に自分で誉め言葉を添えることです。この詩で言えば、進化の歴史を反復して生まれてきたぼくが、マンモスと対峙している自分の姿に「頑張ってるね!」と賛を書き入れることです。根性の小さな自画自賛は慎まなければなりません、くじけそうな時には、遠いご先祖の血を引く自分を奮い立たせるために、このような回想の自画自賛を活用してみたいものです。